

## 徳島飛行場

徳島飛行場は海上自衛隊と民間航空との共用飛行場です。通称は徳島空港で、愛称は徳島阿波おどり空港です。

この松茂町の飛行場は、戦後連合軍に接收されましたが、接收解除後の昭和33年に防衛庁が旧海軍飛行場を整備し、海上自衛隊徳島航空基地として使用を開始しました。滑走路は長さ1,500m、幅45mで、航空基地内には管制塔、格納庫、庁舎等が整備されていました。その時、民間航空は徳島市上助任町の吉野川橋付近の水上基地を使用して、徳島～大阪間で水上機を就航させていました。大阪の基地は当初は堺港の水上基地でしたが、その後、水陸両用機の導入により、八尾空港へ、さらに大阪空港へと移りました。一方、徳島の基地は、昭和36年に運輸省により松茂飛行場が公共用飛行場に指定され、昭和37年に徳島飛行場供用告示があり、昭和38年に徳島飛行場に民間航空機が乗り入れることになりました。徳島飛行場では、昭和39年に東京～徳島間の運航も開始され、昭和40年より空港ビルなどの整備が進められ、昭和42年に新空港としてオープンしました。

その後、徳島飛行場では東京便の旅客需要に対応するため、大型機であるジェット機の就航が求められることになりました。ジェット機は1,500mの滑走路では離着陸できないため、徳島飛行場の拡張問題が課題となり、昭和47年の第二次空港整備五ヶ年計画で徳島飛行場の2,000m級滑走路の整備等が発表されました。徳島県の発展にとっては飛行場を拡張しジェット機を就航させることが必要であるという考え方がある反面、地元の松茂町では騒音や建築規制等のマイナス面もあり、拡張問題は松茂町にとって大きな悩みとなりました。松茂町と徳島県等の協議が忍耐強く継続的に行われ、昭和54年に至って松茂町長と徳島県知事が飛行場の拡張について調印しました。拡張整備工事は昭和56年に着手され、昭和62年に2,000m滑走路が供用され、平成4年には北側平行誘導路が完成しました。

しかし、飛行場の拡張はこれにとどまりませんでした。主要路線である東京路線の旅客需要が増大し、大型機の就航により混雑を解消するとともに、新規路線の開設や国際チャーター便の導入等を推進するため、2,500m滑走路の整備や新ターミナルビルの建設などの拡張整備事業がさらに行われることになりました。事業は平成9年に着手され、平成22年に2,500m滑走路と新ターミナルビルなどの運用が開始されました。

徳島飛行場の利用者数は、平成30年度に118万人を超えて過去最高となりました。定期航路の東京便及び福岡便の利用者の増加に加えて、季節運航の札幌便や香港便、国内及び国際チャーター便の運航などが利用者の増加を後押ししています。

<参考文献：松茂町誌編さん委員会編「松茂町誌続編」1987年、四国の建設のあゆみ編纂委員会編「四国の建設のあゆみ」1990年、四国地方整備局事業評価監視委員会資料など>

